

サボテンスープと不思議な木

ハンス・ブリックマン

溝口広美(訳)

今から四十年前の話をしよう。

ベネズエラから程近いカリブ海に浮かぶキュラソー島と呼ばれる小さな島で、三年間近く暮らしたことがある。十六紀と十七世紀の大航海時代に、オランダやポルトガルやスペインから長期にわたる航海に乗り出した船員たちは、しばしば壊血病を患い、この島の果物を食べてその病を治したといわれ、いつしか、島は、ポルトガル語で「癒しの島」という意味の「キュラソー島」と呼ばれるようになった。一六三四年、スペインから独立したオランダがこの島を植民地化した後も、その名前は変わることなく、今に到っている。

一九五〇年より二十四年間、日本で銀行勤めをしていた私が、一体どうして、そのような離島に行くことになったのか。癒しを求めていたわけではなかった。

一九五九年に見合い結婚をした豊子とともに、作家になる

という長年の私の夢を実現させるため、イギリスへ移住したのが七十年代半ばの時のことだった。もし夢が現実になったら、長期にわたる銀行勤めで燃え尽きた自分を、本来の自分に戻すことができるのでは、と思った。ロンドン郊外の緑豊かな場所で静かに暮らせば、創作のインスピレーションもわき、自分の小説が世界を震撼させるに違いない。ジェラーズクロスと呼ばれる小さな町で見つけた庭付きの一軒家を、「インスウエルハウス」と名付けたのは、井戸(ウエル)で、しっかりと「命の洗濯」をするためというのが豊子の解釈だった。私としては、内面から何かが膨らむ、すなわち、イン(内)からスウエルする(膨らむ)という期待を込めて名付けたわけだったのだが。

それは確かに、ある程度までは達成できた。しかし、執筆だけでは食べていけなかった。二年が過ぎ、厳しい現実に直面せねばならなかった。ある程度の収入を確保するために、銀行業に戻る以外なかった。ちょうどその時、誰かが玄

関のドアをトントンと叩いた。ヘッドハンターだった。東京から私の跡をつけてきた、というのも、私が銀行業に戻ることを知っていたからだと話した。私は「違う」と言った。ところが、然るべき所からやって来たこの男は、やる気のない私の目の前に職をちらつかせた。それは、オランダの名門投資銀行のピアソン・ヘルドリン・アンド・ピアソンのキュラソー島にある子会社の常務取締役というものだった。

躊躇する私に対し、この話を真剣に考えるべきだと言ったのは、いつも冒険好きな豊子だった。やすやすと相手の言いなりになりたくなかった私は、交渉を始めることにした。先方が却下するにちがいないような条件を出したのだ。ところが、それは全て受け入れられてしまい、早速、引越しの手配をしなければならなくなった。一九七六年六月、銀行の組織と経営を知るために、アムステルダムの本社で数週間を過ごした後、今度は新しい職場を知るために、ひとりでキュラソー島の首都ウィレムスタットへ、初めて出かけた。私の前任者から温かい歓迎を受け、現地を案内された。

島の第一印象は忘れられないものだった。常に東から西に吹く風のため、同じ方向に傾いて生えているデイヴィデイヴィという名の木々の群れ。



デイヴィデイヴィの木

大型のアメリカ車の窓から垂れ下がっている黒い腕。カラフルな服をまとう笑顔の女性たち。あちらこちらから聞こえてくる島の音楽。南国の花々の香り。往來には、犬が眠りかけていた。

十八日間、地元のヒルトンホテルに滞在した。ステップ気候のキュラソー島では、海水を処理して真水に変えていることを知った。一九一八年に、シェル石油会社が、ベネズエラ沖で採掘した原油を島で精製しはじめてから、わずかばかりの地下水は枯渇。石油精製工場に、地下水が吸い上げられて

しまったうえ、大気まで汚染されてしまったのだ。

島に滞在して一週間が過ぎた頃、市内の給水が突然止まった。海水淡水化装置が故障したためだった。飲料水や洗濯水のみならず、トイレの排水まで止まってしまった。小さなボトル詰めめの飲料水はあったが、値段はビールより高かった。空気冷却装置は水がないため動かなくなり、ホテルのスイミングプールは、やがて、公共浴場と洗濯場と化したわけだが、衛生上の理由から、三日目に、ホテル側が水を抜いてしまった。誰もが、南に約六十五キロの位置にあるベネズエラの方角を、じっと見つめていた。そこから、給水支援ということでも、真水を積んだ船がウイレムスタットに向かっているという噂が流れていたからだった。私がオランダに戻る頃になっても、船はまだ到着していなかった。

一九七六年九月、キュラソー島での職務を全うするため、豊子を伴ってアムステルダムを旅立った。十時間のフライトに備え、飼い始めたばかりの子犬のイングリッシュ・ブルドッグに睡眠薬を打ち、箱に入れ、貨物室へ保管した。ところが、フライトの途中で目を覚まし、閉じ込められた箱から逃げようともがいた。この時のトラウマは一生消え去ることはなく、成犬になっても、車を含め四方が塞がれた狭いスペースを極度に嫌った。一方で、新しい環境には、すぐさま適応

した。おそらく名前のおかげだろう。アムステルダムにいた時に、この犬を飼い始め、これから暮らすキュラソー島の木にちなみ、「デイヴィ」と名付けた。

幸い、給水システムは復旧し、オフィスや自宅の空気冷却装置も正常に再稼働。枯れた植物の中で生き生きと育っているサボテンの植わった傾斜のある庭付きの家で、トロピカルライフが始まるうとしていた。

ところが、銀行の仕事は、日本では経験したことのないほど困難を極めた。殊に、オランダ人経営陣の間では、明らかに競争心が沸き起こっており、絶え間ない小競り合いやいがみ合いに加え、私のやり方に対する彼らの抵抗のせいでも、オ



デイヴィ



キュラソー島にて、ハンスと豊子
(1976年)



ピアソン・ヘルドリン・アンド・ピアソンのキュラソー島オフィスのスタッフ。上段中央がプリンクマン

フィスの雰囲気は最悪だった。しばらく様子を见ているうちに、この無秩序な状態をいかにして治めたらよいか、わかった。この無法者たちに私が示したものが、それは、力強く決意あるスピーチだった。公正さと理解に基づく明確な提案を示しつつ、それと同時に、何かしらの脅しと警告をほのめかした。金曜日の夕方に一同を集め、月曜日に「イエス」か「ノー」の回答を私にするよう命じた。

私の提案は受け入れられ、秩序が戻り、いがみ合いではなく協力が生まれた。これ以降、島での生活は楽しいものとなり、いつしかお気に入りとなった、ラム酒とココナッツクリームとパイナップルジュースのカクテル「ピニャ・コラーダ」をちびちび飲みながら、週末をビーチで過ごすこと

が多くなった。

ビジネスは順調で、いろいろな国から貿易商や投資家や金融専門家たちが、子会社を設立したい、信託ファンドを始めたい、貸付を申し込みたいという理由で、私の元を訪ねてきた。中には、非常に危険で曰くありげなプロジェクトを持ちかけ、こちらを騙そうとしている話さえあった。例えば、アメリカ南部のとある私鉄会社の重役が、貨物輸送網を改良したいので融資を求めてきた。担保は、広大な南部一帯に点在している貨車と言われた時点で、私は融資を却下した。融資が焦げ付いた時に、年季の入った貨車をどう扱えばいいのか見当もつかなかったからだ。



担保の貨車



カピバラ

イタリア人のビジネスマンからも、珍しい依頼があった。彼自身の言葉によれば、「重税を逃れるためにイタリアから逃げてきた」という。脱税容疑で法廷から逮捕状が発付され、警察から追われていた時に、「文字通り、イタリアとスイスの国境を越えた」。結局、アルゼンチンに移住し、そこでカピバラを飼育する構想を立てている。カピバラとはげっ歯類の動物で、その肉と皮が取引されるといふ。起業のためには、融資が必要で、私を訪ねてきたわけだった。面白そうだと思っただが、イタリア警察を出し抜いて追っ手を逃れたというこの男の、あからさまな自尊心を感じ取り、融資を断った。

キュラソー島は低率課税というよりむしろ、非課税地域と誤解していた人がいたため、こうした奇妙な融資の相談がしばしば持ち込まれたわけだった。いづれにせよ、いかなる相談が持ち込まれても、正しい判断を努めたおかげで、私たちの顧客は信用度の高い、不正とは無縁の人々ばかりだったといえよう。

*

島に暮らす唯一の日本人ということで、豊子は独り寂しく暮らすどころか、楽しみを見つけ出した。自動車の免許を取るため、二十回の講習を受けたが、試験に落ちた。教官から、

あと二十回の講習を薦められたので受講したが、二回目の試験も不合格だった。さらに二十回、それからさらに二十回、もう二十回と続いた。明らかにベテンだ。三人の子持ちの女性教官は、どうしても収入が必要だったのだ。しかし、豊子は気にもせず、むしろ彼女を助けたかっただけではなく、これは島を知る絶好のチャンスととらえた。

百回の講習を終え、ついに免許を取得した。私は彼女の車をアメリカで購入し、キュラソー島に輸送した。独自のデザインがはえるアメリカン・モーターズのペイサーで、あまり見かけたことのないこの車体の形を、豊子はとても気に入っ



豊子の愛車ペイサー



カドシサボテン

ていた。一九七九年にオランダに戻った時、このペイサーも持ち帰ったところ、近所の人が大変珍しがり、それから二年後に私たちがニューヨークに引っ越した時、買い取りたいという人がいた。(ウイキペディアに「アムステルダム のペイサー」という見出しの写真を見つけた。「オランダのバリーカムにある個人の博物館で展示されている」ということだ。もしかしたら、これは豊子のペイサーかもしれない)

豊子はまた、サボテンにも魅了された。殊に、キュラソー島独自の「カドシサボテン」で、島民はこのサボテンから、美味しいサボテンスープを作った。豊子が自宅で試したところ、私たちもこのスープを大変気に入った。サボテンスープなど、地元の名士が集まるような晩餐会にはふさわしくないと言われていたのだが、豊子はそのような忠告を無視し、とある晩、地元の名士と駐在オランダ人を招待したホームパーティーで、サボテンスープを振る舞った。すると、皆が彼女のスープを美味しいと褒め、地元の名士の一人などは、細君に、「お前も作ってごらん」と言っていたのである。

イングリッシュ・ブルドッグのデイヴィも、島の暮らしに慣れ、行儀も良くなっていった。とある朝、花瓶を倒してしまったため、ひどく罰の悪そうにし、気にしなくていいと言われるまで、隅の方で恥ずかし気に立っていた。あるいは、

私がテニスの壁打ち練習を始めると、はね返ってきたテニスボールをくわえ、私の元に持ってくるのではなく、一球一球をリビングルームに運ぶのだった。また、庭のトカゲを追いかけることを楽しんだ。引っ越した当初は、三十センチほどのトカゲが庭中を埋め尽くし、近づくと、トカゲの群れは足元から斜め三十度の方向を指し二手に分かれ逃げていった。デイヴィがトカゲを追いかけ始めたからだろう、やがて、ほとんど見かけなくなった。

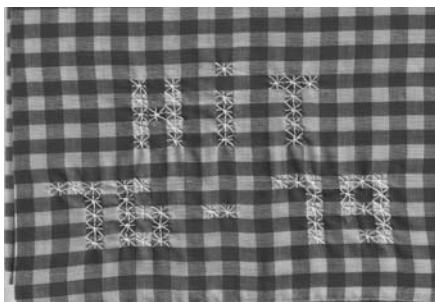
日本とは地球の反対側の土地で暮らしてはいたものの、日本とのつながりは、できるだけ怠らないようにした。ニューヨークやカリフォルニアや日本国内にある日系企業を訪れ、低い法人税率や、アメリカや日本を含む多くの国々と租税条約を結んでいるキュラソー島の利点を強調し、我々の金融サービスを薦めた。おかげで、国際取引のための子会社をキュラソー島に設立し、私たちのサービスを利用したいという日本の企業がいくつもあった。

アンティル諸島の地元ビジネスと駐在オランダ人のメンバーからなるキュラソー・ロータリークラブに加入をして間もなく、講演を依頼された。テーマは日本ということだったので、二十四年にわたる日本暮らしの体験を元に、高度経済成長に伴う社会の変化が進む一方で、古来の価値観や独自の

氣質は変わらない日本について話をした。

一九七九年には、在オランダの日本大使が、オランダ王国の領土にあたるキュラソー島を、公式に訪問した。妻と私は、大使夫妻を、くつろいだ雰囲気のある南国風ダイナーでもてなした。特に、私のお気に入りピニャ・コラーダを、二人は大変気に入ってくれた。それから間もなく、私と妻がオランダ本国に行った時、大使夫妻は私たちのために、晩餐会を開いてくれた。しかも、私たちを歓迎するジェスチャーとして、缶入りのピニャ・コラーダを島より箱で取り寄せる労まで取ってくれた。しかし、恥ずかしい話だが、ハーグ市から大使公邸のあるワセナーと呼ばれる緑豊かな郊外を車で走っているうちに、道に迷ってしまった。道路が再整備され、記憶と違う地形を責めても始まらない。なんたる失態。しかも大使は、私が公邸のある近所で育ったことを知っていたから、なおさらだ。私たちが到着した時には、カクテルタイムは終わり、直ちに食事の席につかねばならなかった。自らの失敗を許すことができない一夜となった。それから三十年以上が経過した、とある晩のこと。東京で、日蘭協会の集まりがあったときに、偶然、大使夫妻と再会し、遅ればせながら、遅刻した無礼をお詫びしたところ、二人とも、そのようなことは気にせず、むしろ、キュラソー島を訪問した時のことを懐かしく覚えていと話してくれた。

キュラソー島を去つてからは、一度も戻ることはなく、まもなく四十年余が経とうとしている。島の経済や島を取り巻く状況は、大きく変化した。二〇一〇年十月、六つの島からなる「オランダ領アンティル」が解体し、もつとも大きいキュラソー島は単独の自治領となり、オランダ王国の構成国となったが、財政面においては、オランダ政府が援助を続けている。一九八五年に、ロイヤル・ダッチ・シェルが、老朽化した石油精製工場をキュラソー政府に売却してからは、ベネズエラの国営石油会社に貸し出している。



ハンスと豊子を示すHi Tの刺繍



職場の部下たちが開いてくれた送別会の様子（1979年5月26日）

一九九〇年代から二〇〇〇年初頭にかけて、キュラソー島の経済は悪化し、そのため主にオランダ本国へ、多くの島民が移民した。その後、島の経済は見事に回復した。観光産業とオフショア金融サービスを主要産業とする、カリブ海で最も高い生活水準を保っている島であると、世界銀行はキュラソー島を評する。

私が勤務していたピアソン・ヘルドリン・アンド・ピアソン銀行は、オランダの銀行に買収されたものの、経営はうまく行かず、やがて廃業した。

二年と八ヶ月に及ぶキュラソー島での思い出は、今も褪せることはない。二十四年間の日本暮らしとは比べものにならないほど異なる島の生活や職場の環境ではあったが、豊子と私は困難を物ともせず、なかなか上手にこなしたわけだった。

職場の部下たちが開いてくれた心のこもった送別会では、私たちのことを「ヒット」と絶賛してくれた。ハンスのHと豊子のT、それに地元の言葉パピアメント語の「いと」を意味するiを組み合わせると「Hit」となる。私たちなりのやり方で、ささやかな貢献ができたことの証あかしといえよう。

ハンス・ブリンクマン氏は「ハブリ」サイトを公開しておりますのでご覧ください。 www.habri.jp